

太田川駅前どんでん広場

Dong-Deng Square, Otagawa Station, Tokai City

平成25年度 都市公園コンクール設計部門(小規模)国土交通大臣賞(「太田川駅前イベント広場」として)

岡田 憲久 *Norihisa OKADA*



写真1 駅側から噴水広場、ゲートベンチを超えて50m歩道(イベント広場)へ。植栽地の土留めを兼ねた「ゲートベンチ」が一旦空間を引き締める。

中心街の再生

愛知県、知多半島の付け根に位置する東海市は鉄鋼の町として発展してきた。その主要駅である名鉄太田川駅周辺で東海市は平成4年より土地区画整理事業、市街地再開発事業、鉄道の連続立体高架事業を進め、中心街の再生に取り組んできた。『太田川駅前どんでん広場』は駅の東側再開発の総仕上げである。都市構造の変革と地域活性化のため、駅前の市街地に緑を主とした広場と歩道を形成するという大切な機会に、総合監修、基本・実施設計、意匠監理という立場で関わった。

山と海が会おう命あふれる場

計画地の周りは再開発の始まる前まではどこにでもある地方都市の駅前の風景であった。しかし視線をちょっと遠方に向け

ば、東には小高い里山が、西には臨海工業地帯の向こうに海が広がる。山と海が会おうとした場所は、生物学的には太古の昔、生命の生まれた場所であり、本来は生態環境が最も豊かな場所である。今は都市の喧騒の陰に見えなくなってしまった命の姿を、都市の広場の森として再生させることこそが、東海市中心街の次の活力を育む場になると考え、計画を進めた。

みどりとにぎわいの都市の広場 ―空間構成―

駅を出るとナンキンハゼの森が迎え、バス乗り場を横に見ながら歩を進めると噴水が現れる。ゲートベンチと呼ぶ石のかたまりが歩道入り口の間を引き締め、その先にイベント広場でもある幅員50mの歩道が延びる。祭りでは東海市の歴史と文化の象徴である9台の山車が一堂に並び、どんでん(回転)を繰り広げる。左右



写真2 ナンキンハゼの森とベンチ。右の球体はモニュメント的案内図。



写真3 高架化された名鉄太田川駅を50m歩道より見る



写真4 50m×30mの芝生広場から駅を臨む。樹高8mのケヤキ並木が骨格をつくる。

は樹高8mのケヤキが並ぶ植栽地であり、祭り空間を確保した上で最大限の緑のボリュームを演出した。その先には芝生広場が広がり、東海市の木であるクスノキが空間の最後を引き締める。

大空間の一方でスモールガーデンや緑地の中を散策できる小道を設け人々がヒューマンスケールで憩える空間を設けた。2ヶ所あるスモールガーデンは東海市の姉妹都市をテーマとしている。その他、歩道の左右に100m続く緑地の土留め壁の天端をベンチとするほか、木陰で座ることのできる場を随所に設けた。

命の森の基本は土の設計

計画地は丘陵部の山裾であり、埋め立て前の海岸線に近く、ちょうど水の集まる場所であり地下水位の非常に高い、植物の生育環境としては適切な配慮の必要な難しい場所であった。生命力溢れる緑が健やかに育ち場に力を与え続けられるよう良質な植栽基盤としての土壌と排水計画の設計を重視した。



写真5 50m歩道の中心は山車の鉄の車輪が通っても支障の無いよう石舗装とした。インド産の波模様が美しい緑がかった花崗岩。両脇はコンクリート平板。透水性と非透水性を交互に並べ質感の違いでストライプ文様を出した。



写真6 植栽の土留めを兼ねたロングベンチ。座面は舗装と同じインド石材。採石した際の石肌をそのまま使用している。立ち上がり部には海をイメージした釉薬タイル貼り。



写真7 5mの歩道に面した弓型のベンチ。アクセントに釉薬タイルをはめ込んだ。



写真8 ケヤキの植わる植栽地の立ち上がり縁石は左右に100m続くロングベンチとなっている。ケヤキは立川ケヤキ。足元ではアセビ、ユキヤナギ、シャガ、アジサイ、ハギなどが季節感を演出する。



写真9 植栽帯の中を緑の小道が通る。



写真10 芝生広場で散策。



写真11 スモールガーデン「ニルフェルの泉」。東海市の姉妹都市であるトルコ共和国ブルサ市ニルフェル区にちなんで、使用した大理石はブルサ産の「ブルサ・ローズ」。絵が描かれたタイルはトルコのイズニック・タイル。ニルフェルはトルコ語で睡蓮を意味するため、制作したトルコのイズニック財団が睡蓮の図柄をデザインした。後にニルフェル区から寄贈されたタイル壁画も設置。



写真12 シスターシティガーデン。大空間に対する小さな空間のひとつ。東海市の姉妹都市を記したモニュメント。それぞれの都市の方向、距離、イラストを記した。(デザイン協力・伊藤豊嗣。その他のサインも。)



写真13 ニルフェルの泉が憩いの場に。

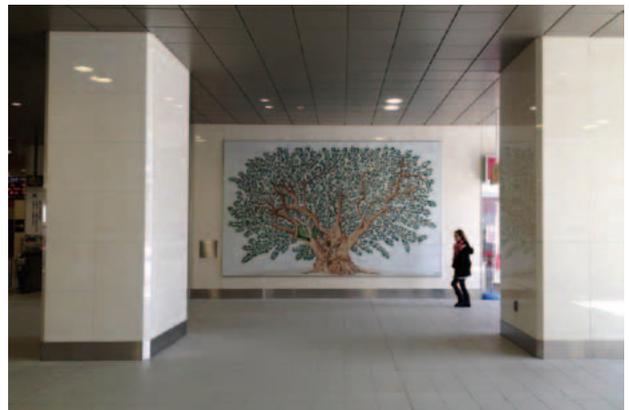


写真14 太田川駅の自由通路にもイズニック財団による陶壁を設置。駅の近くにある大宮神社の「大田の大樟」がモチーフ。トルコのデザイナーは本物の日本のクスノキを見たことがなかったため、写真でやり取りをした。



写真15 噴水広場で遊ぶ子供たち。噴水は直上、噴霧、ミストと表情を変える。雨の日、風が強い日はセンサーで水が止まるようになっている。



写真16 噴水広場のミスト。



写真17 芝生広場の前に埋め込まれた大田の山車を描いた石板。



上/ 写真18 モニュメント的な案内図。文様の美しい浪花白という種類のミカゲ石を使用。

下/ 写真19 自然の原理の一つを象徴するフィボナッチ配列の文様と数式を記したモニュメント。タイムカプセルが埋まっている。(協力・沖啓介)

地域資源であるお祭り等の各種イベントが市民の出資による株式会社まちづくり東海によりひんぱんに開催されており、演劇やダンスの練習など多様な使い方も目にする。



写真20 まちびらきの際、東海市の9台の山車が繰り出した。両側には屋台が並ぶ。公募による広場名は江戸時代から続く大田まつりで山車を持ち上げて回転することを「どんでん」と呼ぶことから名づけられた。(2012年3月)



写真21 知多半島の作家を中心としたクラフトフェアが開催され、若い人々を中心に幅広い年代が訪れた。(2013年5月)



写真22 「につぼんど真ん中祭り」のサテライト会場となった。(2012年8月)



写真23 ビアガーデンとしてにぎわう「太田川ホットサマーガーデン」。(2013年8月)



写真24 地産地消フェア (2012年10月)

材料の故郷までたどることで材料への理解、発想の広がりが得られる。今回は東海市の姉妹都市があるトルコ、また石材の指示のためインド、中国へ足を延ばす機会に恵まれた。



左/写真25 トルコ《ニルフェルの泉》に使用する大理石の選定。中/写真26 トルコ大理石を関ヶ原アトリエにより水鉢に。右/写真27 トルコ イズニック財団において《ニルフェルの泉》に使用するタイルを依頼。



左/写真28 インドにおける花崗岩の採石風景。中/写真29 炎の熱により意図した厚さで石がはがれる。右/写真30 舗装された状態。東海市の海の波を表すためにこの石材を選択。



左/写真31 中国 エントランスゲート、円形舗装に使用する石材の材検。右/写真32 宮崎県にて東海市の木であるクスノキの株立ちを選ぶ。



図1 どんでん広場平面図

名称	太田川駅前どんでん広場
所在地	愛知県東海市大田町後田はじめ3地内
発注者	東海市中心街整備事務所
用途	市道太田川駅前歩道(50m歩道)／市道太田川駅前通り線(駅前広場)／都市公園太田川駅前イベント広場
設計	景観設計室タブラ・ラサ(岡田憲久、田井洋子)、玉野総合コンサルタント(株)、エスプランニング(大石浩)、(株)藤川原設計(シェルター、公共トイレ)、伊藤豊嗣(サインデザイン協力)
施工	日東土木、中村土木建設、シンキコーポレーション、太平洋プレコン工業、石工事田村組、コトキ、東邦治水、山長造園、日比谷アメニス
規模	1.8ha
竣工	1期／2012年3月、2期／2013年4月
仕様	舗装／花崗岩(白、黒、緑系)、トルコ産大理石、インターロッキングブロック、ベンチ／花崗岩、釉薬タイル、イロコ材、水景／噴水、ミスト、トルコ産大理石水鉢、植栽／ケヤキ、ナンキンハゼ、タブノキ、センバシ、メタセコイア、サルスベリ、クスノキ、オオシマザクラ、ウスズミザクラ、コブシ、芝生(エルトロ)他
受賞	平成25年度 第29回都市公園コンクール 設計部門(小規模)国土交通大臣賞(『太田川駅前イベント広場』として)



図2 太田川駅周辺施設配置図

※写真3,4:東海市、その他:景観設計室タブラ・ラサ